

湯原温泉の歴史

古墳時代

湯原温泉は自噴する温泉が数多く存在し、古くから人々に利用されてきました。特に「たたら製鉄」の盛んであった所で史跡や金山(*1)が多く存在します。たたら場には、多くの人手が必要とされ300名から1000名以上の集団で作業を行っていました。たたら製鉄には良質の砂鉄はもちろんながら、燃料として大量の木材が必要であることから山から山への移動が必然で、労働は過酷であり療養としての温泉の利用が行われ、湯原温泉もその拠点になっていたようです。たたら場のイメージは、アニメ映画「もののけ姫」の中にも描かれています。

戦国時代

湯原温泉が歴史的に登場するのは、豊臣秀吉の五大老である宇喜多秀家が、母である「おふくの方」の湯治場を開設したという記述からです。「おふくの方」は妖艶な美貌だったと伝えられ、生まれはこの地方で戦国の数奇な人生の中、羽柴時代に秀吉の側室となった方です。秀吉はおふくを寵愛し、その結果秀家が秀吉の五大老までのぼりつめたとされています。「おふくの方」が病になった際、秀家は療養の地として湯原に湯屋を調えました。

江戸時代

江戸時代になり安全に諸国を往来できるようになると、一般的に湯治場として利用されるようになったようです。温泉の湧く川沿いには、身分により13の浴場が作られています。浴場は主に湯屋(旅館)が管理し、湯賃を取って運営していました。湯屋には芸妓娼妓を置くことが許され、料理や酒の提供も行っていました。その当時、すでに30軒あまりの湯屋があり、宿は木賃宿であったと記述され、米・味噌・醤油に値段を定め宿泊客の便宜をはかったそうです。芸妓などを置いていたことから実際には食事付きの「旅籠」であったと推察されます。湯原に一番多く人が訪れるのは、大山で牛馬市が開かれる4月から9月までだったようです。山陰山陽を結ぶ大山道沿いにあるため、この期間は「大泊まり」と呼ばれ、連日宿泊客で溢れ繁盛を極めたそうです。この有様は、明治後半まで続きました。

明治

明治も後半になると他のライバルとなる観光地も増えてきました。また、鉄道の整備が行われ人の流れが変わってきました。この頃から湯原は、湯治場としての本来の姿に戻っていきます。

*1 金山：製鉄後の屑を積んで出来た小山

昭和初期から40年代後半

右の写真は、昭和初期の温泉街㊤と昭和20年頃の露天風呂㊦の写真です。温泉街の写真の橋は、手前が「湯山橋」、奥に見えるのが「鼓橋」です。バックが鼓岳で、この橋の上で手と叩くと鼓のように「ポンポン」と岩肌に反射して音が聞こえてくることから「鼓橋」と呼ばれるようになったそうです。露天風呂の写真は、ダムができる前の写真です。現在は奥にダムがありますが、この頃はまだダムはなく貴重な一枚です。



昭和26年から湯原ダムの本格的な建設が始まります。建設のための労働者で町は溢れ、ものすごい賑わいがあったそうです。ダムの建設はまだ無名の地であった湯原温泉を一気に有名な観光地にするチャンスでした。旅館は管理者クラスの接待やお偉いさんの宿舎として利用され、小さな居酒屋も無数にでき、どこの施設も每晚潤ったようです。その分、露天風呂はその労働者たちによって占有され、住民は随分困ったという話もありました。



昭和30年に湯原ダムが完成します。湯原温泉で最初の観光ブームが訪れ、キャッチフレーズは「ダムといで湯の湯原温泉」「美作の国、湯原温泉」。ダムによってできた湖には遊覧船が走り、手こぎのボートが浮かび、町には土産物屋ができ、夜の町もより賑やかになりました。当時温泉街には5軒程の旅館がありました。「内湯旅館」というような看板を掲げて、今考えると不思議ですが旅館の中にお風呂があることがステータスであり「売り」になっていたようです。この頃のお客様の交通手段は貸切バスや国鉄、路線バスで、自家用車でお越しになる方はまだ少なかったようです。その後、大阪から乗り換えなしで勝山(月田)まで国鉄の急行列車「みまさか号」が走るようになりました。順調な経済成長の中で全国的な観光ブームがおきるなか、湯原温泉も順調に発展していきました。

昭和34年には町営の国民宿舎「桃李荘」が完成しました。

昭和38年には婦人専用の県営宿泊施設「ママの別荘」が完成し、昭和30年代から40年代の間に旅館の軒数は一気に21軒に増えています。

昭和40年頃になると、一部の客室にはバストイレ付きが現れます。しかし、形態はまだまだ団体旅行で、これらは特室など贅沢なお部屋だけ、その代わりに家族風呂が作られカップルやお子様づれに好評でした。

昭和47年のオイルショックまでに総宿泊収容人数は3千名になりました。旅館の軒数は28軒に増え、増築も盛んに行われました。この20年あまりに渡る時代は夢のような時代で、狭い温泉街の中に飲食店やスナックなどが20軒程、ストリップ小屋が12軒といった様相でした。この時期、芸者の置屋や検番も多く、登録された芸者数は120名を超えたこともありました。夕刻ともなると、旅館のお座敷に向かう芸者衆の艶姿が、温泉街の風情を盛り上げたものです。「一坪の土地が温泉街に有れば一家四人が暮らしていける」そう言われたのもこの頃です。昭和47年をピークに入客数は次第に減少の傾向を示します。



昭和50年代から近代



昭和47年、山陽新幹線の新大阪ー岡山間の開通、中国自動車道・落合インターが開通し、湯原温泉は少なからず好影響を受けました。観光ブームは昭和51年まで続き、旅館のみならず観光関連の事業者は戦後からここまで下げ知らずにきたわけです。しかし、昭和55年頃から商工会青年部を中心とした若者たちが『湯原町は、湯原温泉はこれからどのような方向性を持っていけばいいのか?』と真剣に『町づくり』が語られ、若者たちの観光に対する考え方も少しずつ変わってきました。

昭和55年、旅行作家の野口冬人先生が発表された露天風呂番付で湯原温泉の砂噴き湯(砂湯)が西の横綱として評価して頂きました。雄大な景色と泉質そしてなによりも行政や私有物ではなく地域住民が管理し守り続けている事が評価されたのです。

昭和56年7月13日、湯原町で突然の集中豪雨。真賀温泉の国道313号線が増水のため一部決壊、2次災害の恐れがあるということで道路は全面通行止めという状態になりました。被害は湯原町全域に渡り、死者2名がでる未曾有の天災でした。温泉街も大元の貯湯タンク等配湯設備の被害で、約1ヶ月間、ほとんど営業できないという状態でした。当時は今ほど風評被害について言われませんでした。大きく「湯原温泉被害甚大」等と連日報道されてしまい、これでは本当に湯原温泉が駄目になってしまうと、9月に1ヶ月遅れの「はんざき祭」を行い湯原温泉の復旧宣言をしました。この年ついに宿泊者数が20万人を割り込み、ピークから7万人の減員で雇用も減り始めました。

昭和58年、日教組大会が開催。連日、テレビや新聞でその様子が全国に報道され、街宣車のあまりの騒音に岡山県で「騒音防止条例」が制定されました。この騒ぎは大韓航空サハリン沖撃墜事件まで続き、テレビなどの報道陣が引き上げると同時に静まりました。この間、大勢の人々でごった返し旅館はたしかにどこも満室で、湯原温泉の知名度は、連日の報道でいやが上にも高まりました。しかし、昭和59年、60年と宿泊者数はさらに低下し、温泉地は知名度だけではなくイメージがより大切なことだと気付かされました。



昭和60年7月より、現在も休日に行われている朝市がはじまりました。「観光と農業」、今でこそ当たり前とその融合が言われていますが、当時は画期的なことでした。温泉街全体が賑やかでなければ旅館も栄えないという思いからの朝市スタートでした。この頃から湯原温泉も景気が少しずつ上向きます。

昭和の終わり頃になると露天風呂ブームが訪れます。混浴露天風呂が人気で、湯原温泉の共同露天風呂「砂湯」も大人気でした。週末などは「芋の子を洗う」といった有様で、これは今でも根強い人気です。しかし、静かに入浴したいというお客様も増え、旅館の中にも露天風呂が作られるようになります。

昭和61年から、大阪直通のハイウェイバスが運行を開始しました。

昭和62年6月26日、利用者らへ感謝を込め、全国に先駆けてこの日を「露天風呂の日」と決めました。現在もこの日には、旅館・ホテルの内湯の無料開放や土産店での割引セールなどが行われたり、お湯取りの儀、露天風呂「砂湯」の大掃除を実施しています。



昭和63年、瀬戸大橋が開通しました。

平成4年、米子自動車道が落合一湯原間でつながり、交通の便が良くなりました。

平成15年、湯治場としての機能を充実させようと、温泉の専門知識を持って正しい入浴方法を観光客に教える「温泉指南役」を正式認定しました。

最近の宿泊動向

最近、湯原温泉を訪れるお客さんが以前と比べて変わりました。温泉街といえばおじさんやご高齢の団体さんが下駄の音を鳴らしながら、露天風呂に向かう姿をよく見かけたものです。しかし最近では、若いカップルやグループで旅行に来ている人がたいへん多くなり、個人・家族連れの若い層のお客が増えています。その一方、観光バスでの団体のお客さんが目に見えて減っています。数年前まではめったに見られないことでした。これは、宣伝効果が上がったということもありますが、団体から個人への旅行形態の変化の波に湯原温泉がうまく乗ってきた結果といえます。